

Title	太宰治「地球図」論：〈聖〉の純化と〈俗〉化する場
Author(s)	長原, しのぶ
Citation	太宰治スタディーズ. 2010, 3, p. 134-144
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97700
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

太宰治「地球図」論

——〈聖〉の純化と〈俗〉化する場

長原しのぶ

一、はじめに

——『西洋紀聞』『江戸切支丹屋敷の史蹟』との比較——

太宰治「地球図」(新潮、一九三五・一二)は、その執筆資料として新井白石「西洋紀聞」(南蛮紀文選、一九二六・二)、聚芳閣(と山本秀焯「江戸切支丹屋敷の史蹟」(一九二四・六)、イデア書院)の二つを持つ。この二つの資料を「地球図」と比較することでその異同を明確にし、そのうえで「地球図」を読み解く試みはすでに行われている。はじめにその流れをまとめる。

「地球図」と『西洋紀聞』を詳細に比較した渡部若紀氏は、「地球図」はその多くを白石の「西洋紀聞」によって成り立っている。太宰が、つけ加えたものは極めて少なく、あったとしても瑣末なことからとし、「文章および筋立ての点では、太宰の創造はほとんどなかったといつてよい」とする。その僅かな相違

点の中で渡部氏が作品読解に関わる重要な要素として提示する太宰による「つけ加え」のポイントは次の三点である。

作品冒頭の「かなしい眼をして立つてみた」という独特の表現

シロオテの説く切支丹の教法に対し、聞こえぬふりをする白石

地図の中で、虫に食われ、所在のわからないエド⁽²⁾

に示されるのは、「作者の思いが投影された」シロオテ像であり、「太宰の悲しみをもじませている」という共感が生み出したものと指摘する。さらに、その「孤独に死んでいった一人の殉教者」であるシロオテを強烈に打ち出すために、白石像の形成があると捉える。

これに対して、遠藤祐氏は「地球図」では、ほかにも同様の

語り口にしてはばい出会うのだけれど、一方で語り手が『西洋紀聞』(以下『紀聞』と略称する)のあちこちに散在するシロオテに関する情報を、その大事なひとときにおけるなりゆきの明確になるように、取捨選択、整理・按配して、手際よく語っている——その声を聞きのがしてはなるまい」と『西洋紀聞』の影響を重視する。氏がとくに注目するのは、江戸小日向にある切支丹屋敷^④におけるシロオテと白石の三度の「会見」である。四度の「会見」が語られる『西洋紀聞』と比較することで削除された『紀聞』の記す「晦日」の「会見」の意味を作中に求め、為政者白石の立場と「神ととも在る信徒」にほかならぬシロオテの相容れなさとその「孤独」を浮き彫りにする。

さらに、細谷博氏は、「地球図」と『西洋紀聞』を比較しつつ、シロオテではなく、白石にスポットをあてた。氏は、「『西洋紀聞』の「シドチ(シロオテ)の衣服の辞退と白石の批判・説得の場面は「地球図」に採られていない」点と、「地球図」に描かれたシロオテを聴取する最中に「傍見する白石」を根拠に挙げたうえで、「地球図」に描かれる独自の白石像を「世界のひろがり」と多様性を異人から聴かされつつ、「己れ的位置と認識を顧みざるをえない者」と定義し、「白石の」「小さく、惨め」な「孤立感」を読み取る。

一方で、「地球図」と『江戸切支丹屋敷の史蹟』の関わりを説き、「西洋紀聞」及び「江戸切支丹屋敷の史蹟」との比較(地球図「第四段まで」)から作品を捉えたのが山内祥史氏である。氏

は、『江戸切支丹屋敷の史蹟』に確認できる「ヨワン櫃」、「長助はる夫妻の墓」、「八兵衛石と云ふ大石」の記述に「地球図」との一致を見出し、『江戸切支丹屋敷の史蹟』を典拠と断定する。そのうえで、「『西洋紀聞』にも『江戸切支丹屋敷の史蹟』にも見られない」「特有の言述」として、日本に上陸したシロオテが藤兵衛の前に姿を表わした場面を指摘する。そこには「シロオテのことはが藤兵衛に通じないことを強調し、シロオテと藤兵衛との繋がりがついに成立しなかったことを強調する」「目的があったとし、「シロオテの孤立のかなしみ」を強調的に表現することを志向していた」と解釈する。

以上のように、いずれも執筆資料を「地球図」と対照させることで様々な観点と読みを導いた論考であり、示唆に富むものである。ただし、「地球図」と『西洋紀聞』と『江戸切支丹屋敷の史蹟』を全て網羅し、総合的に比較するには至っていない。従って、本論では、あらためて二つの執筆資料と「地球図」を読み比べることでこれまで指摘されていない相違点に注目し、作品に対する解釈を試みる。

二、「地球図」の新たな独自描写

「地球図」と『西洋紀聞』、『江戸切支丹屋敷の史蹟』との比較検証の結果、次の四点を新たな視点として打ち出す。(傍線は引用者に拠る)

シロオテの食事

「地球図」

長崎の奉行たちがシロオテを糺問して失敗したのは寛永五年の冬のことであるが、そのうちに年も暮れて、あくる寛永六年の正月に將軍が死に、あたらしい將軍が代つてなつた。さつといふ大きなさわざのためにシロオテは忘れられてゐた。やうやうその年の十一月のはじめになつて、シロオテは江戸に召喚された。シロオテは長崎から江戸までの長途を駕籠にゆられながらやつて来た。旅のあひだは、来る日も来る日も、焼栗四ツ、蜜柑二ツ、干柿五ツ、丸柿二ツ、パン二ツを役人から与へられて、わびしげに食へてゐた。

「西洋紀聞」(「上巻」附録)

よのつねの日には、午後と日没の後ちに、二度食ふ。(中略)菓子には、焼栗四ツ、蜜柑二ツ、干柿五ツ、丸柿二ツ、パン二ツ。

『江戸切支丹屋敷の史蹟』(後編十「シドチの裁断とその末路」)

又其者は一日二食で、その分量一定し居て終始変ることがなかつた。「よのつねの田には、午後と日没の後と、二度食ふ。飯汁は、小麦の団子、うすき醬油にあぶらさしたるに、魚と、蘿蔔と、ひともじとをいれ、煮たるなり、酢と焼藍とをすこしく副ぶ。菓子には、焼栗四ツ、蜜柑二ツ、干柿五ツ、丸柿二ツ、パン二ツ(後略)

シロオテの所持品

「地球図」

白石は、まへもつてこの人たちと打ち合せをして置いて、当日は朝はやくから切支丹屋敷に出掛けて行き、奉行たちと共に、シロオテの携へて来た法衣や貨幣や刀やその他の品物を検査し(後略)

「西洋紀聞」(「上巻」附録)

その携持ちし袋に入れし所は、銅像、書像、これに供養すべき器具、法衣、念珠、この余は、書、凡十六冊。また、錠のごとき黄金、百八十一。彈のごとくなる黄金、百六十。我国、元禄製の金錠、十八。我国の錢、七十六文。康熙錢、三十一文等あり。そのうち、書六冊は、常に身に随へて、手を停めずして、これを誦すといふ。

『江戸切支丹屋敷の史蹟』(後編二「白石とシドチとの会見」)白石先生は予じめ彼等と会見して打合をなし、又審問の当日は早朝切支丹屋敷に向つて奉行等と共に異人の携へて来た法衣や、貨幣、其他の品物を検査し(後略)

白石の無關心

「地球図」

それから、十日ほど経つて十二月の四日に、白石はまたシロオテを召し出し、日本に渡つて来たことの由を問ひ、いかなる法を日本に広めようと思ふのか、とたづねたのである。その日は朝から雪が降つてゐた。シロオテは降りしき

る雪の中で、悦びに堪へぬ貌をして、私が六年さきにヤアパンニアに使用するやうに本師から言ひつけられ、承つて萬里の風浪をしのぎ来て、つひに国都へついた、しかるに、けふしも本国にあつて新年の初めの日として、人、皆、相賀するのである、このよき日にわが法をかたがたに説くとは、なんといふ仕合せなことであらう、と身をふるはせてそのよろこびを延べ、めんめんと宗門の大意を説きつくしたのである。デウスがハライソを作つて無料無数のアンゼルスを置いたことから、アデン、エワの出生と墮落について、ノエの箱舟のことや、エイセスの十誡のこと。さうしてエイズス・キリストの降誕、受難、復活のてんまつ。シロオテの物語は尽きるころなかつた。白石は、ときどき傍見をしてゐた。はじめから興味がなかつたのである。すべて佛教の焼き直しであると独断してゐた。

「西洋紀聞」(下巻)

既今、その説によりて、ヨラランド鏤版の地図に拠ると、そのデウス降生の地、ジュテヨラのごときは、西印度の地方を相去ること遠からず。また、その説に、エイズス、未だ生れざる以前、ジュテヨラのみ、デウスの教あることを知る。その他、悉く佛教を尊信したりといふ。さらば、エイズスが法を聞くに、造像あり、受戒あり、灌頂あり、誦經あり、念珠あり、天堂、地獄、輪廻、報應の説あること、佛氏の言に相似すといふことなく、その浅陋に甚しきに至

りては、同日の論とはなすべからず。明季の人、その國の滅びし故を論ぜしに、天主の教法、その一つに居れり。

「江戸切支丹屋敷の史蹟」(後編九、新井白石先生の批評) 白石先生はシドチの所説を聞いて之を評し、其の説く所の教法は荒誕浅陋で弁するにたらずと嘲笑して居るが、其人物をいたく賞揚して居る。

シロオテの殉教

「地球図」

・ヨワン・バツテイスタ・シロオテは、ロオマンの人であつて、もともとも各門の出であつた。おさないときからして天主の法をつけ、学に従ふこと二十二年、そのあひだ十六人も先生についた。三十六歳のとき、本師キレメンス十二世からヤアパンニアに伝道するやう言ひつけられた。西曆一千七百年のことである。

・ヨワン榎は伴天連ヨワン・バツテイスタ・シロオテの墓標である。切支丹屋敷の裏門をくぐつてすぐ右手にそれがあつた。いまから二百年ほどむかしに、シロオテはこの切支丹屋敷の牢のなかで死んだ。彼のしかばねは、屋敷の庭の片隅につつまられ、ひとりの風流な奉行がそこに一本の榎を植えた。榎は根を張り枝をひろげた。としを経て大木となり、ヨワン榎とうたはれた。

・將軍は中策を採つて、シロオテをそのち永く切支丹屋敷の獄舎につないで置いた。しかし、やがてシロオテは

屋敷の奴婢、長助はる夫婦に法を授けたといふわけ、たいへんいぢめられた。シロオテは折檻されながら、日夜、長助はるの名を呼び、その信を固くして死ぬるとも志を変へるでない、と大きな声で叫んでゐた。それから間もなく牢死した。下策をもちぬたもおなじことであつた。

「西洋紀聞」(上巻)

また、この人のここに来れること、いかにや思ふと問ふに、されば、この事、我がたの人も心得ぬ事に申すなり。或は、もし、その罪を犯す事ありて、すでに死に当り候ひしを、いかにも、その罪贖ふべき事を思ひはかりて、この国に来らむことを望みしかば、かの国の人も、もし、彼が申す如くに、申ひらくこともありなむには、何の幸か、これに過ぐべき。又、国法の如く殺されんには、元よりの事なりと思ひて、望み請ふところに任せてもや候ふらむと申しき。ヨランダ人の説の如きも、さるあるべしや。某が思ふところは、しかあらず。(中略)かくて、この年の冬、十月七日に、かの奴なるものは病し、死す。五十五歳と聞えき。その月の半ばより、ローマン人も、身、病ひすることありて、同じき三十一日の夜半に死しぬ。その年は、四十七歳にやなりぬべき。

『江戸切支丹屋敷の史蹟』(後編「屋久島に上陸した異人」)又ヨハン榎は伴天連ヨハン、バプチスタ、シドチの屍を葬

つた所で、そこに榎を植ゑて墓標としたのである。この榎は年を経て生長し、根張り、枝しげり、鬱蒼として天を劃し、ヨハン又はジュアン榎といつて記念樹となつて居たが、天明の頃伐り倒されて跡方もなく、今は尋ぬるよすがもないのである。併しながら、たとへヨハン榎はなくなつても、ヨハンその人の事跡は、今日まで伝はり、切支丹殉教者の一人として尊敬されて居たのである。

『江戸切支丹屋敷の史蹟』(後編「シドチの裁断とその末路」)

シドチが危険を侵して切支丹嚴禁の日本へ渡航して来たのは、どういふ動機からであつたのであるか、白石先生は試みに之を和蘭陀人に質したら、和蘭陀人の考へには彼シドチは多分彼の国で死刑にあたる程の大罪を犯したので、其罪を贖ふために何人も危険を怖れて来ることを望まなかつた、日本に密航して来て宣教することを望んだので、法皇庁の役人共は、もし、かれが望むままに日本に渡り切支丹の為に冤罪を申開くことあらば、もつだけの幸であるし、可し申開くことが出来なくて、国法にてらして殺さるるとも重罪人の事だから惜むには足らないし、どちらになつても、損のない一挙兩得の策だから、その望にまかせて日本へ派遣したのではあるまいかといつたとあるが、これは酷評で、むしろ誹謗ともいふべきである。(中略)不幸にしてその目的を達せずあた冒険的企画も無空しく水の泡に帰

し、終に牢死するに至つたのはあはれむべきであるが、彼
は先輩の伴天連共のやうに転宗の汚名を受けず、宣教師と
して切支丹の爲めに死んだのは、これ所謂殉教でその光榮
とする所であらねばならぬ。況哉其の勞苦空しからず、長
助、はるの二人を教化し得たのであるに於てをやである。

以上、新たに抽出した比較箇所をもとに具体的な作品検証を
行い、「地球図」の二つの読みを試みる。

三、シロオテの〈聖性〉

日本上陸を果たしたシロオテの描写は、「あの浅黄色の着物を
着て、刀を帯び、かなしい眼をして立つてゐた」ではじまる。本
国の教会より「伝道」の命を受け、苦難の末辿りついた地に立つ
たとき、何故「かなしい眼」をしているのかという問題はこれ
までも考察されてきた。例えば、渡部芳紀氏はそこに「まわり
の世界にとけこめない者への悲しみ」「前途の多難」の反映を捉
え、シロオテに「昭和十年ころの太宰の姿」を重ねる。最初か
ら「かなしい」目を携えているというシロオテ像の造型の背景に
作者太宰の姿を探ることも一つではあるが、ここでは執筆資料
との比較からその理由を明らかにする。

先に挙げた「に着目すると、シロオテは「来る日も来る日も
焼栗四つ、蜜柑二つ、干柿五つ、丸柿二つ、パン一つを役人か
ら」へられて、わびしげに食べてゐた」といふ。これは「西洋

紀聞』『江戸切支丹屋敷の史蹟』に記された食事内容とほぼ一致
するもので、両資料によればあくまでも日常的な食事といえよ
う。禁欲的な生活を自らに課していたシロオテを考慮すれば決
して「わびし」さに繋がるとはいえない。従つて、この食事内
容自体が「わびし」「さの元凶とは見なせず、むしろ、「わびし
げ」な様子には「かなしい眼」のシロオテに通じる内面の問題
としての寂寥感が漂う。

そこで、最初から付与された「かなしい」さを「に挙げたシロ
オテの殉教から解きほぐす。「西洋紀聞』『江戸切支丹屋敷の史
蹟』において、シロオテの渡来目的とその背景は諸説記されて
いるが、その中でも興味深いのがシロオテ罪人説である。「或
は、もし、その罪を犯す事ありて、すでに死に当り候ひしを、
いかにも、その罪贖ふべき事を思ひはかりて、この国に来らむ
ことを望みしかば」、『西洋紀聞』上巻)の記述と、「シドチは多
分彼の国で死刑にあたる程の大罪を犯したので、其罪を贖ふ為
め」(『江戸切支丹屋敷の史蹟』後編十一「シドチの裁断とその末
路」)に渡来したといふ「和蘭陀人」の見解の叙述である。もち
ろん、シロオテが真実、罪人であるかどうかは確定できない。

『江戸切支丹屋敷の史蹟』においては日本でも切支丹に対する
誤解をとき、再び日本にキリスト教の根をはるシロオテの使命
を理解する白石が記されているのに対して、「地球図」は「で確
認できるように伝道師シロオテに無関心な白石を描き、その伝
道理由をあえて明確にしよつとしない。これは、シロオテの

伝道に纏わる事情が本国の意向とは関わりないところにあることを示し、その理由が「かなしい眼」の一点に集中することを志向していないか。従つて、罪を抱えていたかどうかは不明であつても、シロオテが個人的な何らかの事情、もしくは苦惱を抱えたまま日本に降り立つたことは指摘できる。

このように考察すれば、シロオテの殉教は教会の思惑とはかけ離れたところであり、その信仰心は個人的事情の発露と見なせるだろう。その一つの証左として、シロオテの所持品を確認する。シロオテの持ち物ではつきりしているのは「法衣」「貨幣」「刀」である。このうち信仰に関わるのは「法衣」のみだ。「西洋紀聞」の内容と比較すれば、「そのうち、書六冊は常に身に随へて、手を停めずして、これを誦す」という「書六冊」の記載はない。「常に身に随へて」いたことを鑑みれば、この「書六冊」は深く信仰、教義に関わるものであり本国より持ち込んだと想像できる。これを省き、「法衣」のみを強調する意味は何か。この「法衣」は本国の教会から支給されたものではない。「西洋紀聞」(上巻)にはこの「法衣」に関して次のように記されている。

奉行の人々出合ひて、かれが携来りし物どもを見る。我国にて、新たに製られし金銭等の物見えて、また、法衣なりと云ふものの、白布にて作れるを、よくよく見るに、その

裏のかたに、我國の南都にて織出す布の朱印あるなり。

つまり、「法衣」は日本に向かう途上、シロオテ自身の手により作られたものであり、決して所屬する教会のものではないということがいえる。

シロオテは、「ヨワン樓」となつて、現在も「根を張り枝をひろげ」と語られる。これは「比較から明確な」とあり、「地球図」の独自表現である。シロオテの殉教が永遠性を持ち、その「聖性」が強調される要因は、その信仰が教会という組織に組み込まれず、個人の内面を支える純粋な信仰心に根差しているからと結論付けられる。

四、「ローマ教会」と「エド」の〈俗〉化

シロオテの「聖性」はそれを包み込むべき「場」となる。「ローマ教会」と「エド」の「俗性」が描かれることで、より顕著に浮かび上がる構図をとる。次の場面に注目する。

それから、十日ほど経つて十二月の四日に、白石はまたシロオテを召し出し、日本に渡つて来たことの由を問ひ、いかなる法を日本に広めようと思ふのか、とたづねたのである。その日は朝から雪が降つてゐた。シロオテは降りしきる雪の中で、悦びに堪へぬ貌をして、私が六年さきにヤアパンニアに使用するやつに本師から言ひつけられ、承つて萬里の風浪をしのぎ来て、ついに国都へついた、しかるに、けふしも本国にあつて新年の初めの日として、人、皆相

賀するのである。このよき日にわが法をかたがたに説くとは、なんといふ仕合せなことであらう、と身をふるはせてそのよろこびを延べ、めんめんと宗門の大意を説きつくしたのである。

デウスがハライソを作つて無料無数のアンゼルスを置いたことから、アデン、エワの出生と墮落について、ノエの箱舟のことや、エイセスの十誡のこと。さうしてエイセス・キリストの降誕、受難、復活のてんまつ。シロオテの物語は尽きるころなかつた。

白石は、ときどき傍見をしてゐた。はじめから興味がなかつたのである。すべて佛教の焼き直しであると独断してゐた。

このシロオテの教義説法内容は、『西洋紀聞』⁽⁹⁾「江戸切支丹屋敷の史蹟」に同様の記述が確認できる。個人的信仰を根に持つシロオテではあるが、その一方で、「ローマ教会」に属する伴天連としての顔を持つ。そのため、教会の方針に従い、「わづかの機会をとらへて切支丹の教法を説かうと思つて」「ひどくあせつてゐる」といふ姿を見せる。しかし、いざその機会が与えられてもシロオテの説法は白石の耳に届く事はない。ここでシロオテが発する言葉はあくまでも聖書をなぞつたものであり、それは単なる記号としての言葉でしかない。シロオテの死後、その存在そのものが、聖性を帯び、永遠性を持つことに比べるとこの

教会主導による教義伝道の姿はあまりにも卑小といえる。

『江戸切支丹屋敷の史蹟』には、伴天連の派遣目的が「国家を奪ふ陰謀」と捉える説もあり、「ローマ教会」といふシロオテの所属する「場」そのものは、俗的要素を多分に備えるものであつた。このため、「ローマ教会」といふ「場」から切り離されてはじめてシロオテの聖化が成し遂げられるのではないかと先に考察した、シロオテ個人の内から湧き出す純粹なる信仰が前提となる物語設定を重視すれば、シロオテの聖性は「ローマ教会」との対比によってなおさらに強調される。

次に、シロオテの殉教の地である「エド」についてはどうか。みんな頭を寄せて見ると、針の孔のやうな小さいまゝに「エド」のさが止つてゐた。通事のひとりには、そのまゝのかたはらの番字をロオマンと読んだ。それから、阿蘭陀や日本の国々のあるところを問ふに、また、まへの法のやうにして、ひとところもさし損ねることがなかつた。日本は思ひのほかにはせまるしく、エドは蟲に食はれて、その所在をたしかめることができなかった。

『西洋紀聞』「江戸切支丹屋敷の史蹟」には地図に記された「エド」は登場するが、蟲に食はれて、その所在をたしかめることができないという記述はない。当時の日本の状況を『江戸切支丹屋敷の史蹟』から探れば、

禁教以来此等の言葉を口にすると、直ぐ邪教門の徒ではないかと疑はれて、不思議の苛責を蒙るの懼れがあつたから、たとへば言葉を聞かへて覚えて居たものでも、嫌疑を懼れて知らぬ風をして居たのであるが、それから数十年を経た、当時に於いては薩摩の役人も、長崎の通詞も、皆忘れてしまつたものと見える。それにしてもロクソン、カステイラ位の事は心得て居たものがあつたに相違ないが、邪教門に關係ある言葉を知つて居たと云ふ所から、奇禍を招くのを懼れて沈黙して居たのではあるまいか。たとへば和蘭陀専門の通詞とはいへ、カステイラ位の地名を聞きわけることが出来なかつたとは、如何にも不可解のことである。(後編一「屋久島に上陸した異人」)

強固に浸透した禁教への意識を確認できる。シロオテの渡来以前に捕まつた伴天連達の多くは転宗を求められ、厳しい拷問(穴スリ)を受けていたことが記されていることからも、日本において切支丹に対する認識は一つの確固たる方針のもとにあつたことが窺える。それに対して、シロオテの処遇は白石の提示した中策を採用し、「そのち永く切支丹屋敷の獄舎につないで置いた」という随分と緩やかなものであつた。これは同様の記述を、江戸切支丹屋敷の史蹟にも確認することができる。

さて幕府の当局者は、此の上書について、どういふ評議を

なしたかは不明であるが、終に三策のうち、中策を採用したものの如く、之れが採決を下していふ、我國耶穌の法を禁ずること年あり、今彼徒のここに来るは、行人の其冤を告訴する為なりと稱す、もし行人ならむには其国信とすべきものを帶來らずして詭りて我國の人となりて来る、たとへ、其言ふところ実ならしむるも、跡の如きは疑ふべし。しかりといへども稱する所は彼国の行人なり、例によりて誅すべからず。後來其言は徴あらむを待ちて、宜しく判決すべきもの也。因て、彼を切支丹屋敷内に囚へおくことにしたのである。(後編十「シドチの裁断とその末路」)

かくていよいよ彼を囚へおくことにきまつてから、その取扱を緩くし、獄舎から出してキヤラ等が居た所の家に移し、召仕を附し、与力、同心監視の下に、無聊の生活をなさしめたのである。爾來数年の間は、何事もなく至極平穩であつたが、それから六年目の正徳四年(一七二四年)の冬、またまた切支丹さはぎが、もちあがつて当局者の心臓を寒からしめた。(後編十「シドチの裁断とその末路」)

ここからは、禁教という一つの価値基準が綿々と続きながらもその制度認識自体は形骸化し、表面的なものとなつてゐることを読み取ることができる。「地球図」に描かれた独自描写である、蟲に食われて空洞となつてゐる「エド」のもつ象徴的意味合いはその形骸化した「場」をより明確に押し出すことにあつたと

いえる。

白石とシロオテの「会見」において、白石の興味は専ら異国の場所、文化、言葉にあり、切支丹の話題になると「なぜか聞こえぬふりをする」のである。このように、表面上は幕府の命に従いつつも、学者としての個人的な関心に力を注ぐ白石に代表された「エド」のあり方からは、もはや、守るべき制度の本質を失いながらそれでも形式は崩さず、形に拘って取り纏うことをやめない俗性が窺える。この「エド」の地でシロオテは「ヨワン櫃」となり、聖性を体現するのである。この「場」との対比もまたシロオテの聖性を強化する役割を担う。

五、おわりに——「かなしき物語」としての「地球図」——

「地球図」には発表当時、「はしがき」⁽¹³⁾が付されていた。

拙作「ダス・ゲマイネ」は、此の國のジャアナリズムより、かつてなきほどの不当の冷遇を受け、私をして、言葉通ぜぬ國に在るが如き痛苦を嘗めしむ。(中略)もとより、これは風刺に非ず、格言に非ず、一篇のかなしき物語りにすぎず、されど、わが若き二十代の読者よ、諸君はこの物語読了のち、この國にまた頑迷にして、よき通事ひとり、好學の白石ひとりなきことを覚悟せざるべからず。

太宰は、「ダス・ゲマイネ」の註釈を求められながら、それを返

け、「地球図」という「かなしき物語」を発表した。ここに示される「かなしき物語」は、シロオテと「場」から読み取れる対峙構図を鑑みれば、シロオテの聖性が社会と乖離したところで成立し、死で持つて完結するという悲劇を指す。従って、太宰が指し示すところの「いまだ頑迷」な「この國」によってその悲劇は齎されることを示唆する。

太宰は「地球図」を「風刺に非ず」とする。シロオテに太宰を重ね、「ローマ教会」、「エド」という「場」に太宰を、「冷遇」した「ジャアナリズム」を捉えることは容易い。だが、あえてその個人的な確執からなる「かなし」さを封印し、「若き二十代の読者」全般に拡大する普遍性を持たせたことは作品を読み解く上で重要である。そこには、シロオテの個人的な信仰が聖化されることで、個に留まることなく、現在も続く「聖性」として「根を張り枝をひろげ」、「大木」となったそのあり方を「焦点化しよう」という意図が見て取れる。ただし、そのあり方には純化されるが故に「場」とは相容れない「かなし」さやどうしても付き纏うのである。

- 注1) 渡部芳紀「地球図」論——太宰治の「方法」(『太宰治心の王者』一九八四・五、洋々社)
- (2) 渡部氏は、に関して「原典では、エドとするせし所也」と出ている、ここに太宰の戯画化が行われている」と指摘する。
- (3) 遠藤祐「地球図」の語りとは——『西洋紀聞』ほかのかかわりで(『太宰治研究17』二〇〇九・六、和泉書院)
- (4) ここでの「同様の語り」は、「西洋紀聞」の記述をほぼ忠実に取り入れた語りを指す。
- (5) 遠藤氏は「西洋紀聞」にある「晦日」の「会見」を「おのれの知識欲を満たそうとする」「好学の白石」の私的な行動」と解釈し、「公式の「訊問」ではなかったと捉えている。
- (6) 細谷博「開かれ、閉じられた「地球図」——ちいさな白石」(『太宰治研究17』二〇〇九・六、和泉書院)
- (7) 山内祥史「地球図」論(『太宰治研究1』一九九四・六、和泉書院)
- (8) (1)と同じ。なお、山内祥史氏も「かなしい眼」に言及しており、同様に「作者の体験に基づいた言述」とする。
- (9) 「西洋紀聞」(下巻)には「デウスといふ。(デウス、漢に主天と訳す)デウス、初に、天地萬物を造らむとするに当りて、まづ善人を住ましむために、諸天の上に八ライソを作り、(中略)無量無数のアンゼルス作る。(中略)男を作りて、アダンと云ひ、その右脇の一骨を取て、女を作りて、エワといふ。即ち、これ、人の始めなり。(略)」とある。
- (10) 『江戸切支丹屋敷の史蹟』(後編八「切支丹教義及びその来歴」)には「デウス初に天地萬物を造らむとするに当たり、まづ善人を住ましめために諸天の上八ライソ(天堂)を造り、無量無数のアンゼルス(天使)を作る。其後に大地世界を作つてタマセイナ(浄土)を取りて男を作つてアダンといひ、其右脇の一骨を取て女を作つてエワといふ。すなはちこれ人

- の始也。彼の男女をして夫妻となし、テリアリ(安楽国土)の地に居らしめ、其余の地をば鳥獣のある所とす。(略)」とある。
- (11) 『江戸切支丹屋敷の史蹟』(後編一「屋久島に上陸した異人」)
- (12) 『江戸切支丹屋敷の史蹟』(前編四「密航して来た伴天連の運命(其の一)」)
- (13) 「はしがき」には「新潮」編集者榎崎勤氏、私に命ずるに「ちかごろ何か感想云々」を以てす。案ずるに、「ダス・ゲマイネ」の註釈などせよとの親切心より発せしお言葉ならむ。」とある。(『新潮』一九三五・一二)